



一 国主義にもの申す

— 安全対策の個別価値 —

し 清 み 水 ひ 久 ひ 二*

1. スイス人は好戦的な国民?

スイスが永世中立国であるのは、その国民が平和愛好国民であるから、と小学校の教科書で学んだ。しかしスイスの歴史を読めばわかるように、スイスの歴史は内戦の歴史そのものである。つまりスイスの平和は惰性の産物ではない。

筆者は数年前にスイス南部のティツィーノ州、コモ湖の姉妹湖畔、伊との国境の町「ルガーノ」に投宿したことがある。ここはスイス屈指の景勝地である。その湖面の美しさに忘我の一時を過ごした後ふと公園の花壇に目をやると、おやと思う。それは赤、白、黄色等の多色の菊が完全に多様性を維持する形で植えられている。日本であれば、ある一定区域は「赤」にし、暫く離れた所で「黄色」にする、という風にブロック的に棲み分けであろう。ここでは赤+黄色+……を一对にする、というモザイク的配色である。その多様性がまた非常に美しい。

ところでスイスは大別して四つの文化圏から構成される。それはこの土地がローマ、ゲルマン、ケルト、およびほかの少数民族の固有文化の接点になるからである。公用語はドイツ語、フランス語、イタリア語およびローマン語であり、連邦議会ではそれぞれの言語を使用してよい。ドイツ語の演説に対してフランス語で反論するという光景をテレビで見たが、異様である。国の正式名称も、鉄道の駅も四つの言語で併記される。さらに北部バーゼル市の教会ではミサに四つの司祭席を用意するという徹底振りである。

ところで、学校教育ではなにかの普遍的な言語文化を教えているのかと思い、近くの中学校の図書館を見せていただいた。驚いたことに所蔵図書は全部イタリア語である。Enciclopedia Italiana (イタリア百科辞典)も備えられており、完全にそのアイデンティティは古代ローマにある。歴史的に見て、ドイツを始めとする一つの文化圏がこの国を一つに統合しようとする動きは何度かあった。その度にひどい内乱が発生し、

結局は現在の平衡状態に落ちついたと思われる。永世中立を標榜するのも、もし一つの勢力に加担すれば必ずやバルカン半島の二の舞になるからである。

2. 全体的価値基準への埋没の危険性

われわれはとかく良いものは普遍的で、どのように多様であれ、結局は一つの全体的な価値規範に統合できる、という世界観をもっている*1。これが古来日本の伝統的平等観である。この発想が近年具体的な問題で限界にきていると思う。例えば学術研究の世界では大学の業績評価に論文数やその引用数が評価パラメータとして使われる。これが全国比較の最も公正な尺度とされる。

このような発想を推し進めていけば、ページ数や図表の数え方まで議論が進むであろう。この種の議論の無意味さは今更ここで指摘するまでもない。現状は論文数は世界一流、その経済効果が先進国中最低では形式主義もここに極まれの感がする。

安全管理でも同様である。現在の安全法制は個別の安全対策(安全設計、安全システム)の価値を評価しない。事故や災害が発生すればそれを個別担当者の過失に押し付ける。それは全国的な統一規範を維持するためである。

しかし今や時代は市場経済の真っ只中にあり、すべてが激しく変化する。可変的な世界ではどこに安全の根拠(ヘッジ)を求めていくか、が価値になる。

英国が世界規模で推進している認定・認証の民営化とその活動の概念は、信用価値の市場化である。この路線は債券評価の世界でのS & P社の役割に似ている。今や民間の債券信用評価でも世界経済に激震を与えるのである。

安全対策を一元価値への埋没と捉えるならば安全工学に未来はない。競争とは個性を競う事であって、量的効果によるダンピングを意味しない。

* 横浜国立大学大学院工学研究院：〒240-8501 神奈川県横浜市保土ヶ谷区常盤台79-5

*1 大きいことは良いことだ(事大主義)